

平成 17 年度
中四国学生剣道リーダーゼミナール
実施報告書

『南予の母なる川「肱川」を中心とした水郷「大洲」で、

中四国を担うリーダーを目指そう』



2006 年 5 月

中四国学生剣道連盟

実施概要

期日：2006 年 3 月 18 日（土）～20 日（月） 2 泊 3 日

会場：国立大洲青年の家

宿泊：国立大洲青年の家

〒795-0001 愛媛県大洲市北只 1086



主催：中四国学生剣道連盟

主管：愛媛大学剣道部

参加者数：男子学生 43 名，女子学生 19 名，学生役員 9 名，指導員 6 名（計 77 名）

講師：大城戸功（松風館館長）

実行委員：高橋経範（実行委員長：香川大学）以下，中四国学生剣道連盟学生役員（8 名）

日程

18 日（土）

- 12:30～ 受付
- 13:45～ 開会式
- 14:00～ 実技指導 I ・稽古
- 17:30～ 入浴
- 18:30～ 夕食
- 19:30～ 講演会

19 日（日）

- 9:00～ 実技指導 II ・稽古
- 12:00～ 昼食
- 14:00～ 審判講習 ・稽古
- 17:30～ 入浴
- 19:30～ 懇親会

20 日（月）

- 9:00～ リーゼミ選手権
- 12:00～ 閉会式
- 13:00～ 昼食・解散



・面の打ち込み

できるだけ息を切らずに、ただし、声はしっかりと伸ばす。一拍子の打ちを心がけて打ち込む。

・小手面の打ち込み

元立ちの注意点として、小手を打たせるときは竹刀を上げるようにして隙をつくり、横にあけて打たせてはいけない。小手を受けた後は竹刀を右にそらして面を打たせるようにする。受け方（隙の作り方）重要であり、打たせる前は正しく構えてうまく間合いをとることが必要である。

・応じ技（返し技、すり上げ技、抜き技、打ち落とし技）

応じ技を行う第一段階として、まずは大きくすり足で打つ。これを行うことでバランスを保つようにすることができる（図 1. 1 参照）。すり上げる時は竹刀を前に差し出すようにし、こねずに最短距離にすることを意識する。間合いを考え、下がりながら打つ、前に出て打つなど発展させていく。

・面返し胴

面を返すときには自分から竹刀を迎えに行く。目付けが大切なので、打突前後で視線が移動しないようにするために、姿勢が崩れないように意識する。

* 応じ技における全体的な注意点

- ・打つときも打たれるときも姿勢を正しく
- ・ただ受けるだけ、ただすり上げるだけではレベルの低い稽古になってしまう。お互いに意識して工夫をする

・礼法

帯刀したとき柄頭は身体を中心線上に。構えたとき左膝を正面に向けようとすると楽につま先が真っすぐになる。

最初と最後の蹲踞と礼は喜び、悲しみ、はやる気持ちなどをこらえて行う。そして、相手への感謝の気持ちを忘れてはいけない。きちんとした礼法ができることで剣道の質も上がる。

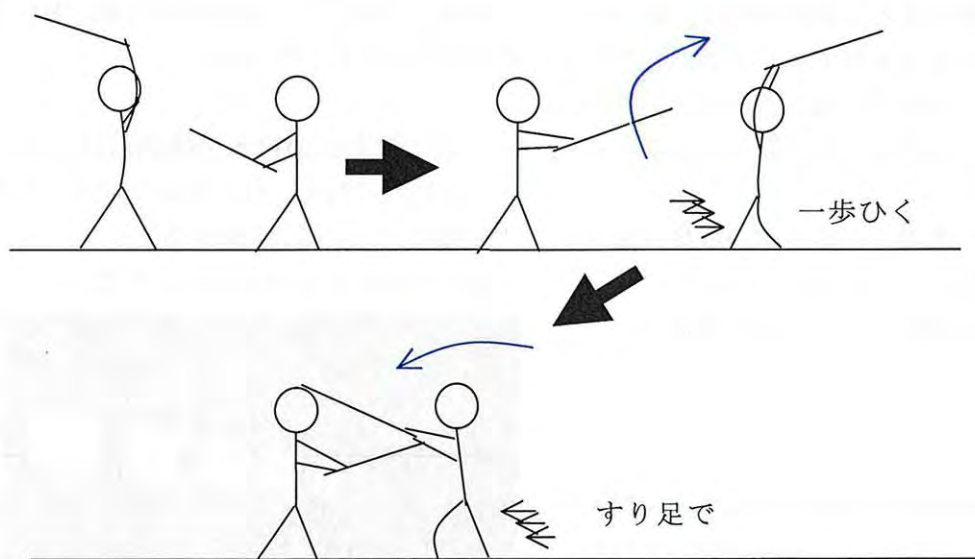


図 1. 1 応じ技練

2、講話（平成 18 年 3 月 18 日）

剣道の理念について

剣道教士八段 大城戸功

[講師紹介]

剣道教士八段 大城戸功先生

愛媛県松山市出身。小学校 6 年生より剣道を始め、新田高等学校から松山商科大学（現松山大学）へ進学。第 25 回全日本学生剣道選手権大会優勝。第 7 回世界剣道選手権大会で優勝。平成 2 年に松山市内に「松風館」を開き、剣道の普及と後輩の養成に尽力されています。

はじめに

今回の講話は、大城戸先生による剣道の持つ理念について、そして剣道をする人々に対する願いや思いについて話していただきました。講話の中で剣道の理念の奥深さを聞くにつれて、剣道をする人間としての責任と誇りを感じました。以下では講話の中で先生が特に力を入れて話された部分について記述させていただきます。

○ 剣道をしている人たちに

300年の歴史をもつ剣道の後継者であることを自覚して誇りに思ってください。

剣道の目的は最終的に人間形成であり、そのためには理念が必要。

人間形成とは立派な人間になることである。では、立派な人間とは何か？

- ⇒ ・嘘をつかない（剣道の技に対しても同じ、ごまかしは通用しなくなる）
- ・怠けない（辛くても稽古をするなど）
- ・やりっぱなしにしない（残心に通じる）

社会的に立派な人間とは何か？

- ⇒ ・迷惑をかけない
- ・わがまを言わない

皆さんに剣道を生涯続けてもらいたい。これが大城戸先生の一番の思いです。

“継続は力なり” → 続けることが“道”である。途中で辞めてしまえば今までのことが台無しになる。

剣道はさまざまなねらいを持って取り組む人がいる。

→ 人それぞれ求めるものは違う。その違いを否定せず皆が認め合うことが大切です。

いろいろな年代の人たちと稽古ができるのは剣道だけしかありません。皆さんはこんなに素晴らしいことをしているのだから、自分たちの剣道に誇りを持ってもらいたい。だか

からこそ、せめて道着を着ている間はビシッとした気持ちを持ってもらいたい。一つの技を創りだすために命を落とした方たちがいることを考えればいい加減な気持ちではいけないはずだ。

剣道は楽しいものではなく、辛く苦しいものです。

→ 修練の道なのだから当然のこと。しかし、それを乗り切ったときの達成感、充実感が人生における最もいい思い出となる。こうした経験が自分のことを好きにさせてくれる。厳しい稽古の後で面を取ったときの爽快感はたまらない。楽しさはこの一瞬だけでも十分なもの。

剣道をやり続ければ、絶対にいい人生になる

技術を向上させるために最も必要なもの何か？

→ 竹刀を“刀”と意識して稽古に取り組む。そうすれば自ずと礼儀作法も良くなる。



○ 学生からの質問に対して

Q：学生時代どのような稽古をされましたか？

A：やらされている稽古から自ら求める稽古にしました。

↑
時間が長く感じる

↑ ⇒ “工夫”をすること
時間があっという間に過ぎる

Q:プレッシャーをどう克服されましたか？

A:プレッシャーを飲み込むことが大事で乗り越えようとしてはいけない。誰でも緊張するし、プレッシャーがかかる。それを無理に消そうとしたり片付けようとしたりとすると逆効果になる。プレッシャーと仲良くすることが大事です。

* 天才とは努力できる人のことです。

Q:一本を取るための心構えとは何ですか？

A:自分が打てる体勢をつくる → 相手が隙をつくるまで我慢する
→ 相手の隙をつくる

↓

打ち込む

この段取りをしっかりしないと一本にはならず無駄打ちとなる。
有効打突の条件を常に頭においておくことが大事。

Q:スランプからどのようにして脱出されますか？

A:スランプからの脱出の仕方は人それぞれなので、いろいろなことを試してみることで
す。(息抜きに何かする、がんがんと稽古するなど)

○ 最後一言

これからはどんどんと女性が活躍できる時代になってきています。だからこそ剣道をぜひ続けてください。そして、それに負けず男性たちも頑張ってください。



* 講話の最初に全日本剣道連盟のホームページに掲載されている剣道の歴史についての資料を紹介されましたので、以下に掲載します。

剣道の歴史を遡るとき、欠くことのできない基本的な段階がいくつかある。その源は日本刀の出現である。彎刀で鑄(しのぎ)造りの刀は日本独特で、平安時代(794～1185)の中頃に出現した。その原形は日本列島東北地方に住み騎馬戦を得意としていた部族が平安初期には既に使っていたと思われる。以来、武士集団に使われ、日本最初の武士政権、鎌倉幕府末期に製作技術は飛躍的に進歩した。「鑄をけずる」といわれる剣の技は、日本刀とともに日本に生まれたものであると言っても過言ではない。

室町幕府(1392～1573)の後半、応仁の乱が始まってから約百年間、天下は乱れた。この頃に剣術の各流派が相次いで成立している。1543 年種子島に鉄砲が伝来した。日本には河床に沈積した品質の良い砂鉄があり、たたらふき法で製鉄し、刀を鍛造していたが、短期間に同じ方法で質のよい鉄砲を大量に生産することに成功した。それによりそれまでの重装備の戦闘方式は軽装備の白兵戦へと大きく変化した。そうした実践体験を踏まえて刀を作る技術の高度化・専門化が進み、洗練された刀法が確立され、新陰流や一刀流などの諸流派に統合されて後世まで継承されている。

江戸幕府(1603～1867)の開府以後、平和な時代が訪れるに従い、剣術は人を殺す技術から武士としての人間形成を目指す「活人剣(かつにんけん)」へと昇華し、技術論のみでなく生き方に関する心法まで広がった。幕府初期には柳生宗矩の「兵法家伝書」、第三代将軍家光のために「剣と禅」を宗矩にたのまれて沢庵が解説した「不動智神妙録」、宮本武蔵の「五輪の書」などは、そうした思想を集大成した兵法書である。中期・後期にも各流派の理論が出され、夫々は今日でも多くの剣道家に示唆を与える名著になっている。

これらの書が武士に問いかけたことは、如何にして死を超越して生に至るかという問題であり、それはそのまま武士の日常生活の教育でもあった。武士は、これらの指導書、また教養書を学び、日常生活は厳格で質素であり、才能を磨き、武術に励み、善悪を知り、一旦緩急があれば藩のために国のために命を捧げることを知っていた。通常の仕事は現代でいうと官僚であり軍人であった。ここで生まれた武士道の精神は 264 年に及ぶ平和の中で養われ、封建制度の幕府が崩壊しても日本人の心として現代に生きている。

他方、太平の世が続き、剣術は実践的な刀法から華麗な技がつくられていく中で、新たな基軸をうちだしたのが直心影流の長沼四郎左衛門国郷である。長沼は正徳年間(1711～1715)に剣道具(防具)を開発し、竹刀で打突し合う「打込み稽古法」を確立した。これが今日の剣道の直接的な源(みなもと)である。その後、宝暦年間(1751～1764)に一刀流の中西忠蔵子武が鉄面をつけ、竹具足式の剣道具(防具)を用いて打込み稽古法を採用すると、またたく間に多くの流派に波及した。寛政年間(1789～1801)ころには、流派の壁を越えて他流試合も盛んになり、強い相手を求めて武者修行をする者も相次いだ。

こうして江戸幕府後期には、「袋しない」よりも腰の強い「四つ割り竹刀」が発明され、胴もなめし革をはり漆で固めたものが開発された。俗に「江戸の三大道場」といわれる千葉周作の玄武館、斎藤弥九郎の練兵館、桃井春蔵の士学館などが勇名を馳せるのもちょうどこの頃である。千葉はまた、竹刀打ち剣術の技の体系化をはかり、打突部位別に技を体系化した「剣術六十八手」を確立した。千葉が命名した「追込面」や「摺揚面」など、多くの技名は今日でもそのまま使われている。

明治維新(1868)になり、新政府が設置されて武士階級は廃止され、続いて帯刀が禁止されたことにより失業者は激増し、剣術は下火になった。

その後、明治 10 年西南の役を契機に警視庁を中心に復活の兆しが見えはじめた。明治 28 年(1895)には、剣術をはじめとする武術の振興を図る全国組織として大日本武徳会が設立された。ほぼ同じころの 1899 年に武士の思想の集大成とも言うべき『武士道』という書が英文で出版され、世界に影響を与えた。

大正元年(1912)には剣道と言う言葉が使われた「大日本帝国剣道形(のち「日本剣道形」となる)」が制定された。流派を統合することにより日本刀による技と心を後世に継承すると共に、竹刀打ち剣道の普及による手の内の乱れや、刃筋を無視した打突を正した。竹刀はあくまでも日本刀の替りであるという考え方が生まれ、大正 8 年、西久保弘道は武本来の目的に適合した武道および剣道に名称を統一した。

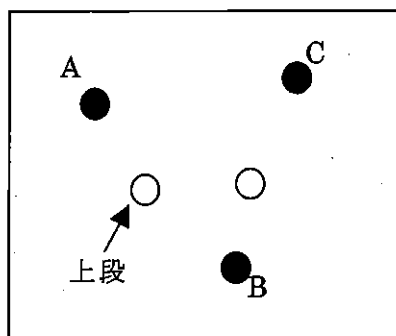
第 2 次大戦敗戦後、連合軍の占領下におかれた日本で、剣道は抑圧されていたが、昭和 27 年(1952)独立回復後、全日本剣道連盟が結成されるとともに甦った。今日では、学校体育の重要な一部分を構成するとともに老若男女を問わず、庶民の間に拡がり、数百万人に及ぶ幅広い年齢層の愛好家が竹刀を持ち、ともに稽古に励んでいる。

また、世界各地で剣道を愛好する外国人も増え、昭和 45 年(1970)には国際剣道連盟(IKF)が結成され、第 1 回世界剣道選手権大会が日本武道館において開催された。平成 15 年(2003)7 月にはイギリスのグラスゴーにおいて第 12 回世界剣道選手権大会が開催され、41 カ国・地域から選手が集まった。

4、審判法実習（平成18年3月19日）

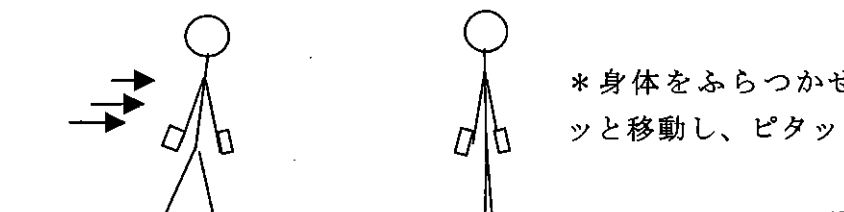
審判の注意事項

- ・ 3人合わせて旗を開く。主審は副審が準備できるまで待つ。
- ・ 試合者から絶対に目を離さないようにする。
- ・ 主審、副審を交代するときは旗を巻かず、右手に持つだけでよい。
- ・ 団体戦の場合、最後の選手が礼をするのと同時に審判も礼をして旗を巻いて戻る。（このとき、白旗が見えないようにする。）
- ・ 上段の選手を審判するときは突きなどが見えにくいので、見える位置にいる審判は特に注意する。（図4.1参照）
- ・ 自分だけでなく、他の審判の位置にも気を使う。
- ・ 審判の移動は素早く行い、移動後は踵と踵をつけておく。（図4.2参照）
- ・ 審判の位置取りとして、二等辺三角形を描くようにして立つ。（図4.3参照）
- ・ 反則の場合、主審が「反則1回」（赤のときは右手で、白のときは左手で選手を指して言う。）と言ってから副審は旗を降ろす。
- ・ 鏝迫り合いで約8秒経過してもお互いに動きが見られない場合は、「やめ」をかけてしかるべき対応を行う。
- ・ 旗は中央を持たずに端を持つようにし、人差し指を伸ばして旗の布にかかるようにする。（図4.4参照）



*この場合 A と B は見にくい
ので C が特に注意して見る。

図 4.1 上段に対する審判



*身体をふらつかせずにササ
ッと移動し、ピタッと止まる。

図 4.2 移動方法

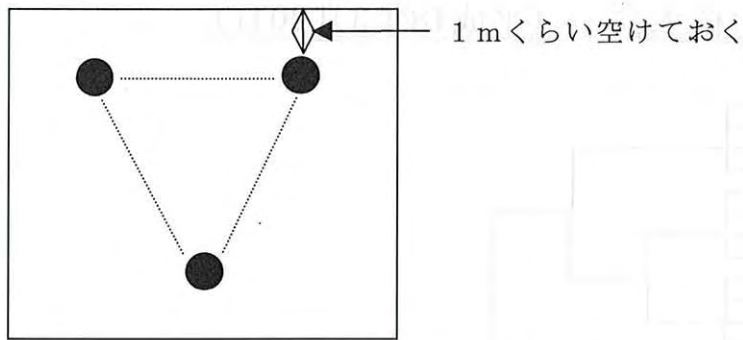


図 4.3 審判の立ち位置

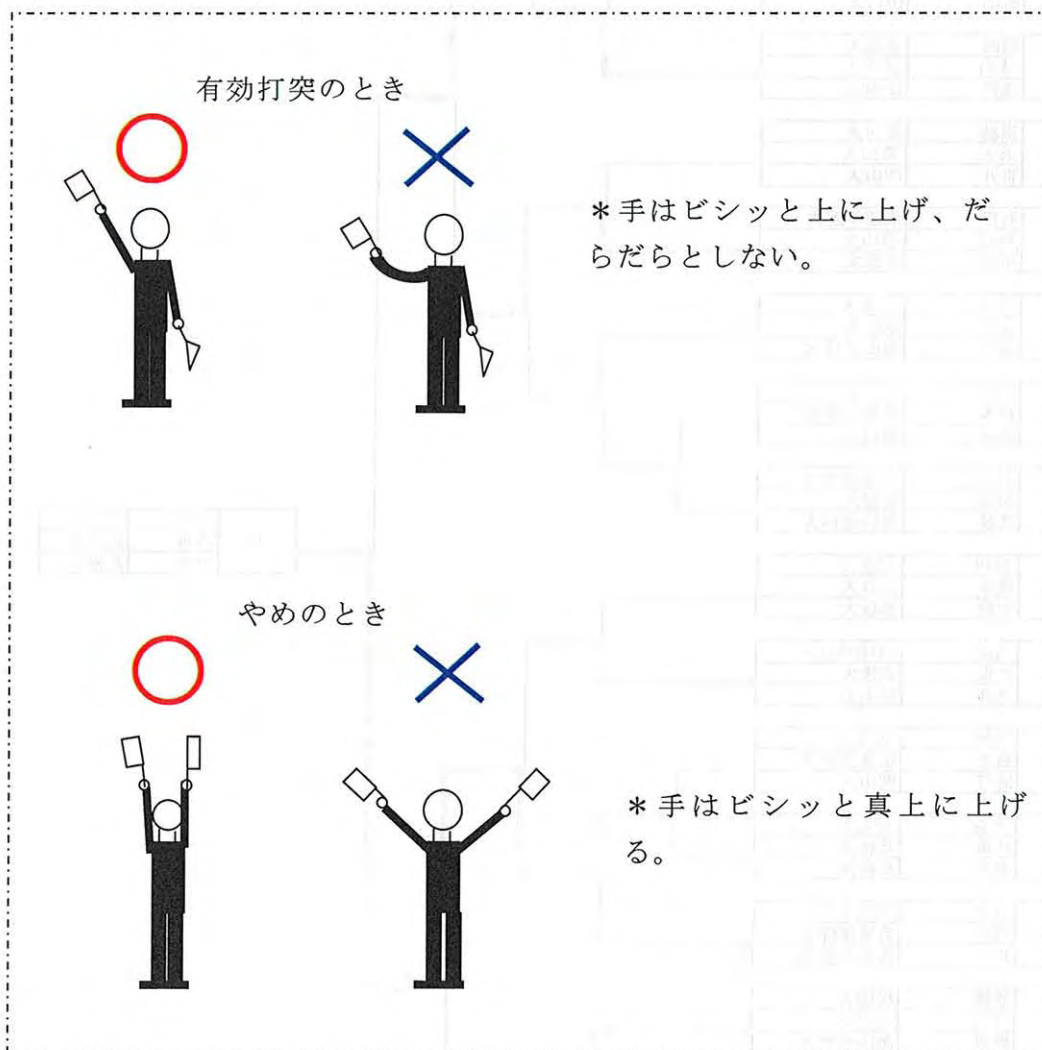


図 4.4 旗の上げ方

4、第9回リーゼミ選手権大会 (平成18年3月20日)

	選手名	大学名
1	星尾	岡山県立大
	鹿田	広国学院大
	野亀	愛媛大
2	田中	就実大
	大神	水産大
	植野	修道大
3	白井	広国大
	牧	愛媛大
	藤本	鳥取大
4	小佐見	愛媛大
	森園	近畿大
	藤澤	香川大
5	尾池	徳山大
	福井	岡山県立大
	杉山	山口大
6	堀内	水産大
	成田	高知大
	浅野	松山大
7	福島	高知大
	長友	高知大
	青井	岡山大
8	石田	広国学院大
	横溝	徳山大
	小松	鳥取大
9	岡田	広島大
	坂本	水産大
	高島	福山平成大
10	松村	広国大
	行本	吉備国際大
	浅越	岡山大
11	浅田	広島文教大
	岡田	愛媛大
	宮崎	岡山理科大
12	宮川	就実大
	橋本	山口大
	宇野	島根大
13	片淵	岡山県立大
	片桐	近畿大
	笠井	徳山大
14	宮崎	広島大
	魚谷	広島国際大
	瀧口	岡山大
15	志賀	聖力大
	六車	島根大
	小谷	島根大
16	岡田	就実大
	藤原	吉備国際大
	東	広島国際大
17	渡邊	松山大
	佐藤	島根大
	榊原	岡山理科大
18	山本	広島文教大
	小野	鳴門教育大
	山村	広島大
19	林	聖力大
	竹内	福山平成大
	土居	広島修道大
20	登澤	川崎医福大
	松井	鳥取大
	栗野	高知大

15	志賀	聖力大
	六車	広島大
	小谷	島根大

優勝

六車 健太 (島根大) 小谷 悠介 (島根大) 志賀 真央 (聖カ大)

準優勝

植野 勝 (修道大) 大神 賢志 (水産大) 田中 沙樹 (就実大)

3 位

土居 祐典 (修道大) 竹内 昇平 (福山平大) 林 映里 (聖カ大)
 石田 真樹 (広国学大) 小松 宏彰 (鳥取大) 横溝 文子 (徳山大)

優秀選手

植野 勝 (修道大) 志賀 真央 (聖カ大)

[決勝戦]

赤	田中 就実大	大神 水産大	植野 修道大	勝本数 勝者数
				ⓧ
白	メ	メ		4 — 2
	ⓧ 志賀 聖カ大	ⓧ 六車 島根大	小谷 島根大	



優勝チーム

5、参加者アンケート結果（平成 18 年 3 月 20 日）

（回答者数 57 名）

1、開催時期について

①良い 21 名 ②まあ良い 13 名 ③普通 17 名 ④あまり良くない 6 名 ⑤悪い 0 名

- ・あと 1 週間ぐらい早いほうがいい
- ・3 月初旬に開催してほしい
- ・時期はいい
- ・自分の大学の合宿と重なっていた
- ・春からの試合に向けて気持ちを高められ、リーダーとしての意識も高まる
- ・新学期が始まる前に行われるのでいい
- ・新学期との境目にリーダーを集めて行うのはいい
- ・寒い時期としてはいい
- ・時期リーダーのためのものなのでこの時期は適切
- ・ちょうど春休みの土日なのでいい
- ・春休みなのでいい
- ・新しい学年が入る前なのでいい

2、日数について

①長い 4 名 ②適切 50 名 ③短い 3 名

- ・一泊でいい
- ・充実した 3 日間であった
- ・きつもなく楽でもなくよくて、あと一日あってもいい
- ・良い日数
- ・適度に仲も良くなり、ライバルとしても意識も残りいい
- ・短期間だがその分集中できていい
- ・3 日間ほどがちょうどいい
- ・適切であり、1 日目と 3 日目が半日なのがいい
- ・短すぎず長すぎず集中できる
- ・2 泊 3 日が限界だ
- ・ちょうどいい長さで技術も学べ、他の大学と交流できてよかった
- ・もっと長ければみんなと交流できた
- ・もっと稽古時間が長いほうがいい

3、開催場所について

①良い 6 名 ②まあ良い 6 名 ③普通 14 名 ④あまり良くない 18 名 ⑤悪い 13 名

- ・かなり遠い、広島で行ってほしい
- ・床がかたい。
- ・自然に囲まれた稽古しやすい環境である
- ・遠方である
- ・広島でしてほしい（江田島青年の家はどうか）
- ・施設行事が面倒である
- ・遠方からの参加はきつい
- ・バスの迎えがあったので良かった
- ・環境はいいが遠い
- ・寒い
- ・交通の便が悪い
- ・遠いが、ご飯はおいしい
- ・星空のきれいな場所だった
- ・広島がいいのではないか
- ・乗換えが面倒だが近くてよかった
- ・移動に時間がかかる
- ・もっと交通の便がいいところがいい
- ・きれいで良かった
- ・花粉症がひどいので山奥などはやめてほしい

4、企画内容について

①良い 13 名 ②まあ良い 24 名 ③普通 16 名 ④あまり良くない 3 名 ⑤悪い 1 名

- ・とても楽しかった。さらに成長した企画にしたら最高だと思う。
- ・先生方にかかれる時間がもっとほしい
- ・楽しく交流できた
- ・貴重な講演を聴けてよかった。
- ・偉大な先生に教われてよかった
- ・稽古や交流会など普段出来ないことができてよかった
- ・試合は必要ないのでは
- ・勉強になりました
- ・他の大学と交流を持ちつつ試合ができていい
- ・剣道に関する講話が聴けてよかった
- ・とても楽しく素敵な思い出になった
- ・中四の他大学のレベルを知ることができいい刺激になった

- ・もっと指導がほしかった
- ・先生方ともっと稽古したかった
- ・交流会など他チームと話す機会がありよかった
- ・講話などの貴重な体験ができていい
- ・本当に良かった
- ・楽しかったが懇親会の次の日に試合はきつい
- ・基本を重点的にできてよかった
- ・審判講習が良かった
- ・懇親会はいらない
- ・自分のためになりました
- ・審判法や講話などは普段ないので良かった
- ・後輩たちに伝えたいことをたくさん学べてよかった

5、参加費用について

①高い 11 名 ②適切 45 名

- ・9800 円ぐらいがいい。
- ・普通だと思います
- ・中身ある合宿にこの値段での参加は良かった
- ・宿泊だけなら高いと思うが懇親会があったのでいい
- ・このくらいはかかると思う
- ・自己負担は大きいと思う
- ・参加費はいいが、交通費がかかりすぎる
- ・交通費がかかるのももう少し安いほうがいい
- ・出費のかさむ時期なのでもう少し安く
- ・食事、宿泊のことを考えれば損のない価格
- ・具体的な明細を出してほしい
- ・この値段は安い
- ・交通費のことを考えてほしい

6、お知らせ

今回のリーダーセミナーの写真を以下のサイトで閲覧することができますので、ご自由に利用してください。

http://photos.yahoo.co.jp/tyushi_leasemi

平成 17 年度リーダーセミナーを終えて

中四国学生剣道連盟 高橋 経範

去る、平成 18 年 3 月 18 日（土）～20 日（月）に国立大洲青年の家において、「平成 17 年度中四国学生剣道リーダーセミナー」を愛媛県の大城戸功先生、中四国学生剣道連盟の先生方のご指導の下、中四国各大学剣道部の次期リーダー及び学生役員の 77 名、18、19 日には同時期に合宿中の愛媛大学剣道部の方々も参加して開催しました。

1 日目、開会式での先生方の紹介と挨拶の後、さっそく大城戸先生の実技指導に移りました。素振り、切り返しと始まり、基本打ちの細かい部分にいたるご指導を受けました。普段の稽古でおろそかにしがちな部分までを見直すことになり、大変身にしみる稽古となりました。また、大城戸先生による講話では剣道の歴史、そして剣道をする人間としてのありかたを中心に、自分を見直し剣道をするものとしての誇りを覚える貴重なお話をしていただきました。

2 日目、初日に引き続き実技指導では大城戸先生自ら体操の指揮をとられるところから始まり、打ち込み、応じ技を中心としたご指導を受けました。午後からの審判講習では審判としての見る目や審判の所作にいたるまでの教をいただきました。普段審判をする機会の少ない学生たちにとって、審判としての注意点などを学ぶことができ非常にいい機会となりました。この日の夜に行われた懇親会では、各大学親睦を深めることができました。

4

この報告書を作成するにあたって、今回のリーダーセミナーが本当に充実したものであったと改めて感じます。単なる実技講習としてではなく、各大学の代表として参加することで今回学んだことを大学に持ち帰り仲間に伝えることで一層リーダーとしての役割を認識し、磨きをかけることとなります。また、懇親会における他大学の学生とのつながりは今後の人生において大きなものになったと思います。今後、このリーダーセミナーが中四国の学生剣道を活気付け、互いに磨きあっていければと思います。

最後になりましたが、このリーダーセミナーを行うにあたり、ご指導、ご尽力を賜りました諸先生方、愛媛大学剣道部の部員、学生連盟役員ならびに参加されました学生の皆様のご協力に対し、心より感謝の意を表し感想とさせていただきます。

平成 18 年 5 月 8 日